「ばかり」の意味構造

—動詞アスペクトとの関連から—

高　永　　茂

1　はじめに

「ばかり」が用言に付く形式は多彩である。森田（1972）は，「ばかり」が用言および文に接続する場合を，統語論的な特徴から九通りに分類している。あるときは，「憎らしいばかり（に）きれいだ」と，例示による状態の程度を表現する。あるときは，「いま出発したばかりだ」（直後），「運び出すばかりになっている」（完了に近い状態）と，いわゆるアスペクト詞的な用法がある。また，「泣いてばかりいる」（限定，しきりに…する）という用法もある。

本稿では，用言や文に接続する「ばかり」のうち，とくに動詞と関連して使用されている「ばかり」を取り上げて分析する。森田の分類の中で動詞と関連している「ばかり」の用法を，意味的な特性から整理すると，アスペクト詞的な「ばかり」と複数性を表わす「ばかり」に分類することができる。

沼田（1986）は，一種のアスペクト詞的な「ばかり」を，次の四例を挙げて説明している。「用意はできた。もう出かけるばかりだ」，「今にも泣き出さんばかりだ」，「今日，こちらに来たばかりだ」，「先日，結婚したばかりだ」。沼田は，このような「ばかり」は，形式副詞やとりたて詞などのいずれとも異なるため，別カテゴリーとして区別しなければならないとしている（沼田，1986年，p. 201）。

次に，「ばかり」が事態の複数性を表現することについて，杉本（1992）は，「最近雨ばかり降っている」，「あいつは嘘ばかり言う」などの例を用いて説明している。この例の統語論的な語順は，「名詞＋ばかり」となっている。しかし，沼田が指摘しているように，「ばかり」のとりたてのスコープは後方の文末にまで及ぶことがある（沼田，1986年，p. 147）。文末の用言だけを直接とりたてる以外は，文中の名詞句の後ろにあって，文全体をとりたてるBスコープ（後方移動スコープ）の方が好まれるのであろうと沼田は述べている（前掲書，p. 149）。「最近雨ばかり降っている」の例においても，「ばかり」は直接「いる」に後接しているわけではないが，前方に位置しながら後方の「降っている」までをスコープに入れていると解釈することができる。このような理由から，「名詞＋ばかり」の構文で複数性を表わす「ばかり」も分析対象に含める。

「ばかり」に関しては，「だけ」と対照させた研究も行われている。陳（1992）は，「個限定」と「類限定」という概念を導入して，「だけ」と「ばかり」との違いを説明しようと試みている。個限定が「だけ」，類限定が「ばかり」に対応している。個限定は，用言によって表される状態的なものを固定化して，あたかもまとまりのある有形のもののように捉えなおしたり，現実に複数のものをも，言語的に単一化したりする力を持っている

(陳，1992年，p. 13)。一方，類限定は，「複数」の意識を背景に持っており，用言はもとより，体言によって表されるまとまりのあるものでも，そのまとまりや形をぼかし，状態的に捉えなおしてから限定を行うという特徴を持っている（前掲書，p. 12)。この指摘は，「ばかり」の意味構造を考える上で，有益な示唆を与えてくれる。

本稿においては，アスペクト詞的な「ばかり」と複数性を表す「ばかり」とを統一的に説明できるような，「ばかり」の意味構造を設定することを目的としている。あわせて，その意味構造は，「ばかり」の類限定という特徴とも矛盾のないものとなっていなければならないと考えている。

2　アスペクト詞的な「ばかり」(注1)

2.1　「ばかり」とモダリティとの関係

「ばかり」には，次のような動詞のアスペクトに関わる用法がある。

(1)　準備はできた。もう，出発するばかりだ。

(2)　妹は，今にも泣き出さんばかりだ。

(3)　いま，日本に着いたばかりだ。

(4)　先月，結婚したばかりだ。

例文(1)の「ばかり」は，「だけ」と置き換え可能である。文の解釈にもそれほど影響を与えない。しかし，(2)，(3)，(4)の「ばかり」は，「だけ」と置き換えることができない。例文(1)〜(4)のうち，(1)だけが「ばかり」を特別な意味で使用しているとは考えられない。アスペクトの面から見て，(1)〜(4)には共通する特徴が見いだせる。これは，もちろん「限定」の意味に由来するものである。(1)，(2)のような未完了相では，動作が開始されるまで間がないことを示している。一方，(3)，(4)のような完了相では，動作が終了して間がないことを表している。未完了相と完了相とのアスペクトの特徴を集約すると，そこには時の限定という意味が存在する。時間軸のなかの，限定された一部を指示するという機能がある。

例文(1)〜(4)に出現する「ばかり」が，共通の意味機能を持っているとすれば，(1)の「ばかり」だけが，「だけ」に置き換わる理由を「ばかり」の限定の意味だけに求めることはできない。

そこで，「ばかり」と「だけ」には限定の様式に相違があるとの観点から検討を試みる。ただし本稿では，「限定」という機能を単純な機能として考える。「ばかり」には「ばかり」の限定があり，「だけ」には「だけ」の限定があるというようには考えない。「限定」という機能は，それぞれの語詞から独立して規定しうるものである。それが，個々の語詞において発現するときには，それぞれの語詞の持つ固有の性格とあいまって，複雑な限定の様相を呈していると考えるのである。したがって，「ばかり」には限定の意味のほかに，限定の機能に影響を及ぼすような別の意味が共存しているのではないだろうかというのが，以下に行う検討の主眼である。

(1)の文構造は，おおよそ次のようなものである。（「もう」の部分は簡単のために除いた）

出発する（命題）	ばかり　だ（モダリティ）

「出発する」という命題を，「ばかり」と「だ」という二つのモダリティ要素が包み込む構造である。「(1′)あとは出発するだけだ」も，同様の構造を持っている。

出発する（命題）	だけ　だ（モダリティ）

このため，(1)と(1′)とは，近似の内容を表現する文として存在しているのである。

しかし，次の例では，文の意味が異なっている。これは，(5)と(6)の文構造の違いから生まれている。

(5) 彼は，来たばかりだ。

(6) 彼は，来ただけだ。

(5)は，

彼が来る（命題）	は　た　ばかり　だ（モダリティ）

と，表すことができる。(6)も統語論的な順序は(5)と変わりがないのであるが，次のような近似の意味を持つ文にパラフレーズすることができる。

(7) 彼は，来るだけは来た。

(6)，(7)ともに「来てからは何もしなかった」という内容の文が後続しうるところから考えても，かなり似た解釈ができる。つまり，(6)の「だけ」が限定しているのは，「彼が来る」の部分だけだと考えられる。これは，益岡（1991）が示しているモダリティの依存関係構造とも一致している(注2)。「だけ」は「取り立てのモダリティ」に属する要素である。依存関係構造によれば，「取り立てのモダリティ」よりも「テンスのモダリティ」が上位の位置を占めることになる。(7)はパラフレーズすることによって，この二つのモダリティの関係を明示した例と言える。

それでは，再び(5)の「ばかり」について考えてみよう。(5)の解釈には，時の限定が入っている。「ばかり」は，「た」という「テンスのモダリティ」要素を包み込んで，その上位に位置する構造をとっている。もし，「ばかり」を純粋な「取り立てのモダリティ」とすると，依存関係構造に矛盾が生じる。これは，「ばかり」を「取り立てのモダリティ」と決めつけてしまったことから，生まれる問題であろう。「ばかり」は，「取り立てのモダリティ」としての意味特徴のほかに，「テンスのモダリティ」の上位にたてるような，別のカテゴリーの特徴も持っていると考えられるのである。

2.2 慣用句～ンバカリ

例文(2)の「ばかり」の用法を，寺村（1991）は，動詞に文語の否定助動詞の連体形ヌが付いた形に後接する慣用句的な用法として説明し，その意味機能を「まだ実現していないが，いつそうなっても不思議ではない状態にある」ことを表すとしている。この説明によ

って，～ンバカリの統語論的な特徴とおおよその意味を知ることができる。

杉本（1992）は，否定的雰囲気を伝える文において「ばかり」が使用されることがあると指摘している（杉本，1992年，p. 12）。例文(2)も，「妹が泣き出すことに対して，話し手が懸念や罪悪感を抱いている」と解釈できる。杉本は，～ンバカリの例は挙げていないが，この例も否定的雰囲気を伝える用法と連続するものであろう。

(2)では，～ン～が介在することによって，発話者の懸念や不安が表現されている。あわせて，「ン」が元来，否定の助動詞に由来することを考慮すると，～ンバカリの～ン～は，フランス語の虚辞 "ne"（ne explétif）と，意味的に近い働きをしていると考えられる。虚辞の "ne" とは，はっきりした否定を表わさず，従節中に潜在する否定の観念を反映する否定の副詞 "ne" をいう（朝倉季雄，1980年，p. 225）。虚辞の "ne" は，①不平等比較を表わす語，②不安を表わす語，③妨害・用心を表わす語，④否定・疑惑を表わす語などと共起する。両者に共通する特徴は，「その事態が発生することは望ましくない」「できたら，その事態を否定したい」といった，発話者の心的態度である。もちろん，日本語の～ン～とフランス語の虚辞 "ne" とが同一の用法を持っていると言っているわけではない。文意全体に加わる，いわゆるニュアンスに関して，両者に共通する特徴が見いだされるのではないかと考えて，対照させたまでである。

～ンバカリという統語論上の連続が，慣用句と言われるように密接に結合した理由は，～ン～と「ばかり」の双方に相互を結び付けるような意味上の類似性があるからであろう。この類似の機能は，発話者の心的態度を表明する働きを持つことから，モダリティに属する機能と考えられる。

「ばかり」には，～ンバカリという慣用句が存在するが，「だけ」には，＊～ンダケという慣用句がない。この理由は，「だけ」が「ばかり」よりも純粋な限定の意味を持っているからだと考えられる。そのため，～ン～と共通する意味領域がなく，＊～ンダケという形式で共起できない。また，純粋な限定を持つため，「取り立てのモダリティ」専属となっており，命題との間に～ン～や「テンスのモダリティ」といった要素を，はさみこんで内包できない。例文(1)においてのみ，「ばかり」と「だけ」とが互換可能なのは，命題と「だけ」との間に他の要素が介入していないからである。

モダリティの依存関係構造から考えると，「ばかり」には「取り立てのモダリティ」よりも上位のモダリティの特徴があることは前述した。いま，例文(2)の分析から，「ばかり」には～ン～と共起しうるような心的態度を表現する機能があるのではないかと予想される。この機能をモダリティの枠組みの中に位置付けるとすれば，「価値判断のモダリティ」がもっとも相応しいということになろう。しかし，従来「価値判断のモダリティ」は，対象とする事柄に対してそうであることが望ましいという判断を表わすものである（益岡，1991年，p. 53）。「ばかり」は，対象となる事柄に対して，そうなることは望ましくない，あるいは，そうなることを否定したいという判断を表わす。本稿では，「望ましい／望ましくない」という，願望における表裏の関係をなす判断であると考えて，「価値判断のモダリティ」に含める。そして，「価値判断のモダリティ」は，依存関係構造において，「テンスのモダリティ」の上位に位置することができるのである。

3　事態の複数性を表す「ばかり」

3.1　動詞の性質と事態の複数性

「ばかり」が，数量詞と複数を許す名詞を除く，一般には複数解釈を許さない名詞に接続した場合，事態の複数性を表現する場合がある（杉本，1992年，pp. 4-6）。

(8)　みかんを三個ばかり買った。（数量詞）

(9)　バーゲンには，女性ばかりが集まった。（複数解釈を許す名詞）

(10)　佐藤君ばかり（が）遅刻する。（事態の複数性）

(8)は数量詞＋「ばかり」，(9)は複数解釈を許す名詞＋「ばかり」の例である。(8)は形式名詞といわれる「ばかり」であり，おおよその数量を表している。(9)の「ばかり」は，バーゲンに集まった女性が複数(多数)であることを表している。一方，(10)に対しては，「佐藤君だけが，何度も遅刻する」という解釈ができる。同じような，複数性の現れる構文には，動詞＋「ばかり」の例もある。

(11)　チャンピオンは，一方的に殴られるばかりだ。

ここで，複数性を許す構文のうち，名詞＋「ばかり」（＋が）の構文を「構文A」，動詞＋「ばかり」の構文を「構文B」と呼ぶことにする。それぞれ，とりたてのスコープが作用する対象が異なっているため，この二つの構文を取り上げる。ただし，構文Aにおいては，文末にある動詞もスコープに入っていると考えられる。

次に，四種類の動詞を使った文を比較する。あわせて，動詞の性質を明確にするために形容詞「強い」の例を含める。

a「いる」
　構文A　＊太郎ばかりが，いる。
　構文B　＊太郎は，いるばかりだ。

b「泣く」
　構文A　？花子ばかりが，泣く。
　構文B　　花子は，泣くばかりだ。

c「出かける」
　構文A　？太郎ばかりが，出かける。
　構文B　　太郎は，出かけるばかりだ。

d「殴られる」
　構文A　　チャンピオンばかりが，殴られる。
　構文B　　チャンピオンは，殴られるばかりだ。

e「強い」
　構文A　＊太郎ばかりが，強い。
　構文B　＊太郎は，強いばかりだ。

それぞれの文の適格性と不適格性とをまとめると，表1のようになる(注3)。

「いる」は，構文Aにおいても，構文Bにおいても，かなり不自然な文になる。「泣く」は，構文Aでやや不自然な文になる。構文Bは，場面によっては自然な文になる。「出かける」は，構文Aで，場面によっては自然な文になる。たとえば，「太郎は毎日出かけて

いるのに，自分だけがいつも留守番をしなければならない」といった状況での発話と考えれば，自然な文と言えよう。一方，「殴られる」は，構文Aでも構文Bでも，適格な文となり，複数性を保っている。

「出かける」の構文Bについては，注意が必要である。このままでは，やや不自然である。構文Aと同様の解釈もできるが，発話者を主語にとり次のような状況を設定すると，自然さを増す。

(12)準備はできた。もう出かけるばかりだ。

「出かける」の構文Bにおいて，「ばかり」が行為の直前を表すアスペクト詞的な働きをしているとき，もちろん複数性は読み取れない。

表1　構文A・Bの適否

	構文A	構文B
いる	不適格	不適格
泣く	?	適格
出かける	?	適格（注意）
殴られる	適格	適格
強い	不適格	不適格

3.2　動詞が表現する事象

この四種類の動詞が，表1のような違いを見せる理由について，動詞の持つアスペクト的な性質に着目して分析を加える。分析の過程で，以下の用語を使用するが，これらの用語の詳細な説明は，山田（1984）『アスペクト論』を参照していただきたい。

- 均質性
- 密
- 反復間ギャップ（注4）

これらの概念は本来，動詞の表現する事象そのものの性質を説明するために，創出された概念である。アスペクトの観点から動詞を分類する方法としては，～テイルや～テアルの接続の仕方や，その時の動詞の示す意味を手がかりとする方法もある。しかし，そのような形態論的・意味論的な特徴を生み出す原因を探っていくと結局，動詞の表現する事象にまで議論が及んでしまう。本稿で事象自体の検討を行うのも，このような理由からである。

均質性というのは，事象が行われている時間帯の任意の二部分を取り出したとき，その二部分が等質ということである。また，密とは，時間帯の任意の二点をとっても，さらにその間の二点間の点をとっても，事象が継続中であるということである（山田，1984：p. 96; Mourelatos, 1981)。均質性を持つ事象は，達成点を持たないという特徴がある。

Comrie (1976) や Lyons (1977) は，事象をその構造から，状態 (state)，活動 (process)，できごと (event) に分類している。状態は，均質であり，密である。活動は，均質ではあるが，密でなくてもよい。つまり，均質性という点について，状態事象と活動事象とは類似の性質を持っている。できごと（遂行，完成）は，均質ではないが，終りの点

（達成点）を除けば，その他の部分は均質である。行為が遂行されている間は，活動と見なすことができるからである（山田，1984：pp. 96–97；Mourelatos，1981；Bennett，1981）。

このように説明すると，従来から行われてきた四種類の分類，すなわち，状態動詞，継続動詞，瞬間動詞，第四種の動詞の分類基準とかなり重なる部分がある（町田健，1989：pp. 24–52）。四種類の動詞分類の枠組みを用いても，「ばかり」と動詞との関係を説明することができる。しかし，動詞の表示する事象そのものを観察の対象とした方が，言語化されていない状態や動作の特徴を説明しやすくなる。

前述のａ～ｄの動詞について，具体的に説明してみよう。

「いる」は，状態事象を表している。「いる」という事象のどの二部分をとっても，「いる」ことに変わりはない。つまり，等質である。また，任意の二点をとっても，さらにその二点の間の点をとっても，「いる」という状態は継続している。つまり，密である。「ばかり」は，このような状態事象を表現する動詞とは，共起しにくいようである。

形容詞「強い」も不適格文になる。形容詞は，事物が有している属性を表現している。属性は静的なものであるから，時間の経過の中で，任意の二部分をとっても二つの属性は等質と言える（つまり均質）。その属性は，変化するまで事物が持ち続けるものである（つまり密）。変化することは必ずしも必要ない（達成点は必要なし）。このように，形容詞で表現される属性というものは，均質性を持つ状態事象と極めてよく似た性質を持っている。

「泣く」は，活動事象を表現している。泣いている間，任意の二部分をとっても「泣く」という行為は継続している。つまり，均質性を持つ。しかし，密である必要はない。ときどき泣きやんでも，全体として，「泣く」と言える場合もある。泣くには必ずしも達成点が必要ない。この点で，遂行動詞と異なっている。「泣く」がやや不自然に感じられる理由は，「均質性」と関係があると考えられる。

「出かける」と「殴られる」はともに，遂行動詞の中でも瞬間性のある事象を表している。「出かける」は，家を出る瞬間までならば，まだ出かけていないことになるし，家を出てしまった瞬間には，もう出かけたことになる。「出かける」は，家を出る瞬間の事象なのである。「殴られる」は，相手のこぶしが自分に当っていなければ，殴られたことにならない。「殴られる」のは，こぶしが当るほんの一瞬のことである。

両者は，瞬間事象を表現するという点で共通しているけれども，相違点もある。その違いを説明するときに，従来から「～テイル」を下接するというテストが行われている。それぞれに，「～テイル」を下接すると，「出かけている」，「殴られている」となる。「出かけている」のほうは結果の継続を表し，「殴られている」のほうは反復を表している。そして，「ばかり」は，「殴られる」のような反復アスペクトを表現できる動詞と共起したときに，事態の複数性を表す。

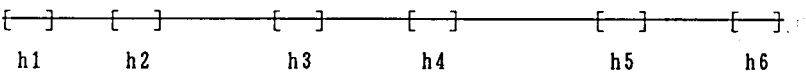
「出かける」では，解釈が分かれる。「出かける」という事象を一回限りのものとすれば，「ばかり」はアスペクト詞的な働きをしていることになる。「出かける」を反復する事象ととらえたときには，「ばかり」によって事態の複数性を表現することができる。

以上のように，「ばかり」の使用は事象のとらえ方と密接な関係にあることがわかる(注5)。ここまでの分析から，「ばかり」の用法を一応整理すると，次のようになる。

①瞬間事象や活動事象を表現する動詞が，反復可能な事象を表現するときには「事態の複数性」の効果を生む。
②瞬間事象を表現する場合でも，反復が予想されないとき，あるいは一回性の事態のときには，構文Bの形式で「アスペクト詞的な」働きをする。アスペクト詞的な用法と複数性を表現する用法とは，事象のとらえ方によって解釈が分かれる。
③均質性を持つ，状態事象を表現する動詞とは，共起しにくい。

3.3 事象間のギャップ

瞬間事象が反復するとき，事象と事象との間には，当該事象の存在しない時間がある。例えば，「ドアを何度もノックしている」というとき，ノックとノックとの間には，ノックをしていない時間がある。事象と事象との間にある，中断や断絶を「ギャップ」と呼ぶ(注4)。そして，反復事象に現れるギャップを「反復間ギャップ」と呼ぶ。事象と事象との間に，適当なギャップがあるからこそ，反復していると言える。もし，ギャップが非常に短い場合には，「ドアが音を立てて震動している」と表現が変化してしまうかもしれない。d「殴られる」の事象とギャップとの関係を，Bennett (1981) にならって図式化するとおおよそ次のようになる。ギャップの間隔は一定でなくてもよい。



(注)［　］内が一回ごとの「殴られる」という事象

図1　反復間のギャップ

一方，同じ瞬間事象でも「出かける」には，ギャップを想定することが難しい。一度出かけてから次にいつ出かけるかが不定だからである。次に出かけるためには一度帰ってこなければならないが，場合によっては二度と帰ってこないかもしれない。反復されない場合には，「出かけた」という結果が残り続けるわけである。反復と結果の継続の違いは，ギャップを想定できるか否かにあるという捉え方もできる。

この比較から，「ばかり」は，反復間ギャップで区切られた，一回一回の事象を限定しているものと考えられる。そこに複数性の効果が生じてくるのである。「ばかり」には，ギャップの想定できない事象をまるごと一つのものとして限定する力はないようである。そのため，「出かける」の構文A「太郎ばかりが，出かける」を何とか解釈しようとすれば，「太郎は，家の手伝いもせずに毎日毎日出かける」といった，事象の反復する状況を設定してやらなければならなくなるのである。状態事象を表現する際に，「ばかり」の使用が難しいのも同様の理由による。状態事象では，ギャップの存在する反復の状況を設定することが難しいため，「ばかり」を使用しにくいと考えられる。

杉本 (1992) は，「複数の機会の事態」というのは，単数の主体が同一行為を繰り返すという場合もあれば，複数の主体が各々一回ずつ単一の行為を行っていき，総体として同一の事態が反復されるという場合もあるとしている。

(13)飢餓によって，子供ばかりが死んでいる。

(13)において複数性の解釈の生まれる原因は，図1と類似の構造が想定できるからである。図1のh1・h2・h3……という行為の繰り返しの代わりに，ある子供の死・別な子供の死・さらに別な子供の死……という事象の連続が想定される（図2）。「死ぬ」という事象の間にギャップが存在し，全体として事象が反復されているので，複数性の解釈が成り立つ。

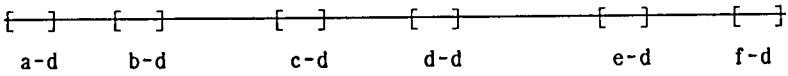


図2　行為者間のギャップ

さらに，事象の発生は同時でも構わない場合がある（杉本，1992年，p.5）。「病院の待合室には，お年寄りばかりがいた」と言うこともできる。この場合まず，「お年寄り」を複数と解釈する必要がある。それによって，時間軸上のギャップに相当するものが，一人ひとりの「お年寄り」の行為（状態）の間に存在することになる。行為者が複数のとき，「ばかり」は状態動詞「いる」とも共起することができる。

3.4　「だけ」との比較

「だけ」は，状態事象や活動事象を表現する動詞と共起することができる。

(14)　部屋には，太郎がいるだけだ。

(15)＊部屋には，太郎がいるばかりだ。

「だけ」と「ばかり」との違いは，限定力の強弱にあると考えられる。「だけ」は，状態事象のように境界が無いような対象でも，まるごと限定できるほどに強い力を持っている。d「殴られる」には，両方が使用可能であるが，ニュアンスが若干異なっているような印象を受ける。

(16)　チャンピオンは，殴られるだけだ。

(17)　チャンピオンは，殴られるばかりだ。

「殴られるだけ」のほうからは，「殴られる」という行為が間断無く続いているような印象を受ける。この効果は，「だけ」の持つ限定の強さのため，事象と事象との間のギャップが押しつぶされた状態になっているために生まれると考えられる。同時に，この場面では，「だけ」よりも「ばかり」のほうが，状況をより的確に表現しているようにも思える。

名詞＋「ばかり」でも平行した現象がある。

(18)　餌場には，白鳥だけが集まっている。

(19)　餌場には，白鳥ばかりが集まっている。

餌場にたくさんの白鳥が群がっているという場面を想定してみよう。このような場面を表現するには，「ばかり」を使った文の方がより適切であろう。「白鳥だけ」では，個々の白鳥を限定しているというよりも，カテゴリーとしての「白鳥」を限定しているような感じを受ける。以上のような，「だけ」と「ばかり」の特徴は，個限定と類限定の対立と同じものと言える。

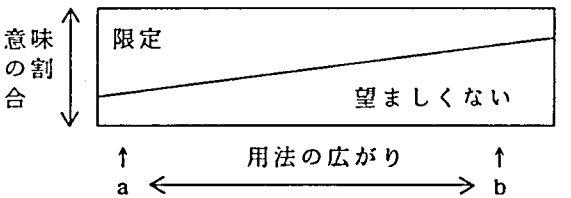
4　「ばかり」の意味構造

アスペクト詞的な用法と複数性を表現する用法とを総合すると，「ばかり」の意味構造を，以下のようにまとめることができる。

まず，「ばかり」は，限定の意味のほかに，「ある事柄に対して，実現することが望ましくないという心的態度を表現する」意味を合わせ持っている。つまり，限定の用法のほかに，「価値判断のモダリティ」に含められるような意味を持っている。

次に，「ばかり」の意味構造と用法との関係は下のように図式化できる。

「ばかり」が用法ごとに，多様な姿を見せる原因は，「限定」の意味と「望ましくない」というモダリティの意味のどちらに比重をかけるかという点に関わっている。例えば，図のａの比率で使用するか，ｂの比率で使用するかということである。



そして，「価値判断のモダリティ」に関わる用法を持っているために，「ばかり」の限定力は「だけ」ほど強くない。「だけ」が動作間にギャップの認められる事象でもまるで一体の事象であるかのようにとらえるのと違い，「ばかり」は事象間のギャップをそのまま残している。このため，事態の複数性の意味が発生する。「ばかり」の持つ類限定という特徴も，この限定力の弱さに起因するものと考えられる。

5　おわりに

上記の仮説と，一見矛盾するような例がある。

⑳　そこには，まばゆいばかりの宮殿があった。

と表現することができる。宮殿がまばゆいばかりに光輝いていることは，宮殿にとっては，望ましい属性である。「ばかり」には望ましくないことを表現する意味機能があるのではないかとした仮説と合致しない。この理由は，⑳の例が多分にレトリックの用法であることと関係している。「まばゆい」だけの意味を検討すると，「まぶしい」意の雅語的表現ということになる(注6)。まぶしいことは，人間にとってやはり心地よい状態ではなかろう。まぶしければ，手をかざしたりサングラスをかけたりする。この例文の場合には，修辞的な効果をねらう目的があるために，「ばかり」が望ましい状況を表現する文脈でも使用されていると考えられる。

動詞アスペクトとの関連からみた意味構造の仮説が正しいとすれば，そのほかの用法についても当てはまらなくてはならない。とりたて詞，形式副詞，形式名詞の用法との関係もあらためて検討する必要がある。また，「ばかり」がこのような複雑な意味構造を持つにいたった，歴史的な側面についても本稿では全く触れることができなかった。まだまだ，残された課題は多い。大方の御批正をお願いする次第である。

注

（注1）山田（1984）が，アスペクト補助詞（aspectualizer）として説明している要素のひとつであり，局相アスペクトにかかわる文法要素として働いている（pp. 174-177）。ただし，山田は，「ばかり」の用法は取り上げていない。

（注2）益岡(1991）によると，モダリティの依存関係は，おおよそ次のようになる（pp. 43-44）。44ページの図(52)を簡略化して示す。「<」の右に位置するものがより上位にある。

［命題］—取り立てのモダリティ<みとめ方のモダリティ・テンスのモダリティ<説明のモダリティ<価値判断のモダリティ・真偽判断のモダリティ<表現類型のモダリティ<ていねいさのモダリティ・伝達態度のモダリティ。

（注3）不適格性の認定が問題である。文脈によっては，何とか解釈できる場合もあるからである。この不適格性というのは，不自然さと言い替えた方がよいのかもしれない。

（注4）Bennett（1981）や山田（1984）を参照していただきたい。

（注5）「死ぬ」は，「出かける」と同じように，瞬間事象を表す動詞であり，「死んでいる」としたときには，結果の継続を表現する。しかし，「ばかり」の使用には，「出かける」にない制限が付く。次の文は不適格な文となる。

＊太郎ばかりが，死ぬ（死んでいる）。

＊太郎は，死ぬばかりだ。

常識的に考えられるいろいろな状況を設定しても，この二文からは複数性の意味を読みとることができない。これは，「死ぬ」という事象の持つ固有の性質によると考えられる。つまり，個人が複数回体験できないような事象のときには，「ばかり」によって複数性の効果を出すことはできない。

（注6）金田一京助ほか（1988年）『新明解国語辞典　第三版』の「まばゆい」の項。

参考文献

朝倉季雄（1980年）『フランス文法事典』（三省堂）.

Bennett, M. 1981: Of Tense and Aspect: One Analysis. In Philip J. Tedeschi and Annie Zaenen, editors, *Syntax and Semantics, Vol. 14.* New York: Academic Press.

Comrie, B. 1976: *Aspect.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lyons, J. 1977: *Semantics 2.* Cambridge: Cambridge University Press.

益岡隆志（1991年）『モダリティの文法』（くろしお出版）.

町田　健（1989年）『日本語の時制とアスペクト』（株式会社アルク）.

森田良行（1972年）「「だけ，ばかり」の用法」（『早稲田大学語学教育研究所　紀要』No. 10）.

Mourlatos, Alexander P. D. 1981: Events, Process, and States. In Philip J. Tedeschi and Annie Zaenen, editors, *Syntax and Semantics, Vol. 14.* New York: Academic Press.

沼田善子（1986年）「とりたて詞」（奥津敬一郎ほか（1986年）『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社　所収）.

杉本和之（1992年）「「ばかり」と「だけ」」（『中京国文学』第11号）.
寺村秀夫（1991年）『日本語のシンタクスと意味　Ⅲ』（くろしお出版）.
陳　連冬（1992年）「「だけ」と「ばかり」について――個限定と類限定の観点」（『青山語文』22）.
山田小枝（1984年）『アスペクト論』（三修社）.

【付記】
筆者は近年，神鳥武彦先生と共同調査をさせていただく機会を得た。そのおりに先生の飽くこと無き探求心に触れ，ただただ敬服するばかりであったことを覚えている。
神鳥先生のご退職にあたり，これまでのご指導に対して，こころより感謝の誠を捧げるものである。

―広島文化女子短期大学助教授―